

森安講義への質問に対する回答（全面的に補足）：

本講義は、私が1年半をかけて書き上げた『シルクロードと唐帝国』（講談社）の約3分の1の内容を、100分の講義に圧縮したものであるので、どうしても情報過多になってしまいました。そのため説明不足が多く、出席者から多数の質問を受けたのですが、その半数以上は拙著をお読みいただければ解決できるように思います。以下には、質問が重複していたり、重要と思われるものを適当にピックアップして、回答します。

繰り返すが、本講義は、高校の現場で教える先生方に歴史研究の最前線に触れて刺激を受けていただくためであり、授業ネタを提供するものではない。その点、講義終了後に回収した質問票の中に、次のような御意見を見つけたのは、嬉しいことでした。

（その1）これまで「教科書で」「中国史」を「教える」ことに、とらわれていたと思います。ユーラシアの中の中国として見直す（とらえ直す）と視界がぐっと開けたような気がします。

（その2）今の歴史学、歴史教育において、最も克服すべきことはナショナリズムによって生み出された一国史観をどうぬぐい去り、多面的視点で世界史をとらえ直すかということ、その点で、大変、示唆に富む報告であったと思います。

なお、拙著の目次と、受講前に読んできていただくことを御願した課題論文3点も念のために挙げておきます。歴史学は「権力」への批判精神を養うためにあること、そして歴史は事項の暗記より「流れ」の方が大切だと教える際には、必ずや参考になると信じています。読者として先ず第一に高校世界史教員を念頭に置いて執筆した拙著も、その方針で貫かれている。

○森安孝夫『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史シリーズ、第5巻、講談社、2007年3月刊行予定）

序章 本当の「自虐史観」とは何か

第一章 シルクロードと世界史

第二章 ソグド人の登場

第三章 唐の建国と突厥の興亡

第四章	唐代文化の西域趣味
第五章	奴隸売買文書を読む
第六章	突厥の復興
第七章	ウイグルの登場と安史の乱
第八章	ソグド=ネットワークの変質
終章	唐帝国のたそがれ
	あとがき

課題論文：

1) 森安孝夫「世界史の中の異文化交流」 柏木隆雄・山口修『異文化の交流』大阪大学出版会、1996年、pp. 87-107.

2) 森安孝夫「《シルクロード》のウイグル商人——ソグド商人とオルトク商人のあいだ——」『岩波講座世界歴史 11 中央ユーラシアの統合』岩波書店、1997年11月、pp. 93-119.

3) 森安孝夫「中央アジア学の今日的意義——新たなる世界史への視点——」『月刊しにか』9-7（通巻 100）, 1998年7月、大修館書店、pp. 70-75.

=====

Q. 「世界史の8段階」について、あまりに軍事力を前面に押し出すことは、現在の我が国の情勢からみて危険ではないのか。

A. これまでの世界史というのは、マルクスの唯物史観の影響も強くあって、どうしても生産力中心の見方をしてきた。言い換えれば、農業地域中心、農耕都市文明中心史観であった。私が、軍事力と経済力、そしてそのバックにある情報収集力（情報伝達手段）に注目するのは、ユーラシア世界史の中に遊牧騎馬民族史を取り込む（正当に評価する）ためであり、軍事力賛美ではありません。まずこの点を御理解下さい。

戦後日本の歴史教育は、それこそ敗戦のトラウマがあって、軍事力が歴史を動かす大きな要素であったと説明することをタブー視してきたように思います。もう戦争は地球上からなくなって欲しいと願ってきたからです。その結果が、近年の平和ボケとか「自虐史観」という揶揄の蔓延や、平和憲法放棄への動きを強めたのです。「権力」というのは常に軍事力（警察力も含む）に支えられて

きたこと、しかし権力が崩壊する時には権力者およびそれに追従して得をしてきた者たちは自己保身にはしり、絶対に一般民衆など守らないのだという冷徹な事実を教えずして、現実的で健全な批判精神を持つ市民は育たないでしょう。若者が歴史を知らない馬鹿ばかりになれば、喜ぶのは軍事力増強で得をする側の人たちなのです。

ところで、私はこの「世界史の8段階」を時代区分とは言っていません。時代区分というと、どうしても古代・中世・近世・近代という発展段階論と結び付くからです。本講義でお分かりのように、漢代と唐代はまったく別の中国文明であり、8世紀の唐と西欧を比べてみれば、唐が圧倒的に進んでいたことは火を見るより明らかです。それなのに当時の遅れた西欧を中世、進んだ唐を古代というのでは、話になりません。また、漢代も唐代も両方とも古代に含まれるという時代区分も、いわば欠陥商品です。なお、次の質問項目とも絡むので、ここに「世界史の8段階」を再録しておきます。

- | | |
|-------------------|------------|
| ①農業革命（第一次農業革命） | 約一一〇〇〇年前より |
| ②四大文明の登場（第二次農業革命） | 約 五五〇〇年前より |
| ③鉄器革命（遅れて第三次農業革命） | 約 四〇〇〇年前より |
| ④遊牧騎馬民族の登場 | 約 三〇〇〇年前より |
| ⑤中央ユーラシア型国家優勢時代 | 約 一〇〇〇年前より |
| ⑥火薬革命と海路によるグローバル化 | 約 五〇〇年前より |
| ⑦産業革命と鉄道（外燃機関） | 約 二〇〇年前より |
| ⑧自動車と航空機（内燃機関） | 約 一〇〇年前より |

Q. 「世界史の8段階」に環境史の視点はあるのか。

A. 当然あります。かつての四大文明の地やギリシアから森林が消滅したように、文明が環境を破壊してきたわけですから、それを無視した歴史など考えられません。また環境と世界史が関わったことは、農業=遊牧境界地帯という概念を導入する際にも言えることなのですが、それについては本講義では取り上げませんでしたので、拙著を参照してください。ただし、以下の点には注意していただきたい。

森安課題論文の1つ「中央アジア学の今日的意義」より引用：「NHKで放映された司馬遼太郎の「モンゴル紀行」という番組の中で、モンゴルの遊牧民を、最小限の家財道具しか持たない欲望のない人々と美化して紹介していた。そし

てその証拠として、隋唐代にモンゴルから中央アジアにかけて大帝国を作った古代トルコ民族の突厥が残したオルホン碑文を取り上げ、その表面には突厥の支配者の葬式に際し、唐の玄宗皇帝から賜った漢文が載せられているが、その裏面には突厥語でこっそりと、中国の絹織物や奢侈品に溺れてはいけないという戒めの言葉を子孫たちへ書き残した、という。しかしこれは完全に誤った説明である。第一、漢文面が表ではない。裏にひそかに突厥語を書いたというのも全くの出鱈目である。実は突厥語の方こそが表で、かつ堂々と自分たちの偉業を誇って書いているのである。問題になった箇所の趣旨は、財物においても人口においても圧倒的に差のある中国をコントロールし、絹織物をはじめとする奢侈品を貢がせ続けるためには、ただでさえ人口の少ない遊牧民族側が一致団結していなければならない。かつて突厥第一帝国が滅びた時のように、一部が中国側の甘い誘いによって分派行動をすれば、全体がやられてしまうのだ、と戒めているのである。遊牧民にも普通の欲望はある。まして支配的立場にあった時代はなおさらである。突厥の支配者の葬儀に際して、当時世界一の富を誇る大唐帝国の皇帝がわざわざ漢文の碑文を親書して贈らなければならないほどに、大唐帝国は突厥の下風に立っていたというのが真実である。同時代の日本に対する扱いとは雲泥の差である。件の番組は、地球環境を破壊する元凶となっている現代の大量消費生活を改め、禁欲的になるために遊牧民を見習うべきだという番組製作者の安っぽい意図のもとに、史実がねじ曲げられた例である。」

Q. 理科系的歴史学とは何か？

A. 私は、世の中に溢れる歴史物は理科系的歴史学、文科系的歴史学、歴史小説の3つに分けられると考えている。大学の歴史学は、理科系的歴史学を基本とする。それは理科系的理論の証明のように、他人が追実験できるレベルであることを意味する。文科系の歴史学においても、史料があって、それをどう組み立てていくか、「みなさん、私はこの史料からこのように考えました、どうですか」というふうに見てもらい、検討してもらおう。それを8～9割の人に認めてもらったら、それで立派な理論だと私は信じている。

しかしながら、歴史学は史料がなければなにも言えないのも現実である。例えば中央ユーラシアには、中国世界やギリシア＝ローマ世界、ペルシア＝イラン世界、ムスリム世界に比べたら、史料がきわめて少ない。遊牧民族がみずか

らの文字史料を持ったのが、ようやく8世紀の第二突厥帝国の時代である。それ以前には何も書かれていない。敵側が、自分に都合のいいように書いた史料しか残ってない。つまり中央ユーラシア史については、理科系歴史学だけで歴史としてのストーリーを語るができないわけです。分かっていることと分かっていることとの間の、大量の分かっている部分を推測していかざるをえない。その推測に、責任を持つのが文科系的歴史学、責任を持たないのが歴史小説である。

Q. 10世紀前後のユーラシアに一斉に中央ユーラシア型国家が出現したのは、お互いに情報交換でもしたからでしょうか。

A. 農業の発明をはじめ、優れたアイデアはあっという間に世界中に伝播します。10世紀前後のユーラシアで、遊牧民が農耕地域を永続的・安定的に支配できる「システム」が成熟してきた時にも、同じようなことが起こったのでしよう。ただし、アイデアが伝播するには、受け取る側もある程度成熟していなければなりません。そういう意味で、私は中央ユーラシアの遊牧騎馬民族がこの頃には総体としてそういう段階に達していたと考えているのです。

Q. 中央ユーラシア遊牧民側の識字率はどれくらいだったのか。もしそれが高かったのなら、文書行政が中央ユーラシア型国家の成立の重要な鍵であるという説明とどう絡むのか。

A. 膨大な史料を残した農耕中国の識字率さえ不明なのに、中央ユーラシア遊牧民側の識字率が分かるはずはありません。ただし、ソグド商人の識字率は、次のような史料から、極めて高かったとみてよいでしょう。

杜佑『通典』卷一九三・邊防九・西戎五、康居之条：韋節の『西蕃記』に云う、「康国人はみな賈（あきない）を善くし、男は年五歳となれば則ち書を学ばしめ、少しく解すれば則ち遣わして賈を学ばしむ。利を得ること多きを以て善しと為す。・・・」と。

Q. 西トルキスタンより遅れた東トルキスタンのイスラム化について、カラハン朝の勢力は東トルキスタン西部にも及んでいたはずだから、森安の説明は不正確ではないか。

A. 確かにイスラム化したトルコ人が作ったカラハン朝の勢力は東トルキスタ

ン西部にも及んでいる。しかし中部～東部には西ウイグル王国（天山ウイグル王国）が9世紀後半からチンギス汗に服属するまでの300年以上、厳然として存在したのである。その原住民（トカラ人や漢人たち）はずっと仏教徒であり、支配者となったウイグル人のあいだでは、最初の100年くらいはまだマニ教徒が優勢であったが、10世紀後半には仏教への改宗が始まり、11世紀には仏教がマニ教を圧倒する。この本物のウイグル人たちがイスラム化していくのは、もっとずっと遅れて、モンゴル帝国が滅んだ後である。それゆえ、モンゴル時代のウイグル商人は仏教徒がほとんどで、一部に景教徒を含むが、イスラム教徒（回教徒）はいない。一方、旧カラハン朝、ホラズム朝など出身のトルコ系商人は、同じトルコ語をしゃべっていてもイスラム教徒であり、それを回回商人と呼ぶ。回鶻（本物のウイグル）と回回との混同・誤解は、中華から見て同じ西方のトルコ系商人であるということに起因するのである。

なお、回教・清真教という言葉は唐宋代には存在せず、四夷教という言葉もない。史料に出てくるのは「三夷教」だけである。勝手にイスラム教を押し込んで四夷教などという用語をでっち上げるのは、最終的に全てがイスラム化した東トルキスタンの新ウイグルの状況を過去にまで投影し拡大解釈するもので、これまた本講義で繰り返したような「勝てば官軍」の誹りを免れまい。

Q. 遊牧民であったウイグルが定住していく過程はどうだったのか。

A. 長い時間がかかっている。支配階級と一般民とでは差がある。貧乏人から先に農耕民化していく。なお、古代ウイグル（モンゴル帝国時代まで）と現在のウイグルとは似て非なるもの。近現代の東トルキスタンの新ウイグルは、私から見れば偽ウイグルである。これについても拙著『シルクロードと唐帝国』参照。

Q. ソグド人とは？ソグド人のイメージがつかめない。唐以降のソグド人の動向やソグド人の活動の終末について知りたい。

A. ソグド人とは、アケメネス朝ペルシアの時代から今の西トルキスタンで20～30ほどのオアシス都市国家を作っていた農耕都市民である。本来、遊牧騎馬民族ではないが、紀元後になって彼らが中央ユーラシアの遊牧騎馬民と接触するようになってから、新たなソグド人（例：安祿山・史思明などのソグド系突厥や沙陀突厥という集団）が形成されていく。民族というのは時々刻々と変化

していくという具体例である。なお拙著では人種・民族・国民の違いについても、かなり詳しく述べている。

唐以降のソグド人の動向（ウイグルとの関係）については、岩波講座世界史の森安課題論文に述べてある。ソグド人の活動の終末は11～12世紀頃。トゥルフアン盆地にあるベゼクリク千仏洞の壁画に見えるソグド人男性（第1回の研修会報告書『シルクロードと世界史』にカラー図版、岩波講座世界史の森安論文にモノクロ図版あり）が、最末期の例。

実は、『シルクロードと世界史』に掲載した英語論文（コレージュ＝ド＝フランス講演）では、カラハン朝時代の西部天山地方にさえマニ教徒がいたことをも論証している。これはソグド人とウイグル人との結び付きから生まれ、マニ教を国教とした東ウイグル帝国が滅亡し、多数のウイグル国人（ソグド系も含む）が天山地方に大移動し、トルキスタンを形成することになった動きの一部である。東方に移住したソグド人がウイグル人の中に吸収されていく過程、ソグド商人がウイグル商人へと「化けて」いく過程については、もう一度、岩波講座世界史の森安論文を参照していただきたい。逆にそれ以前の、ソグド人の歴史全般については、拙著『シルクロードと唐帝国』を御覧いただきたい。

ちなみに、8世紀以降にイスラム化していったソグド本国のソグド商人の伝統が、いわゆる回回商人の中に入っていくのである。回回商人の中心は、イスラム教トルコ化した旧ソグド人といってもよい。

Q. 経済力も武力もあったのなら、なぜソグド人自身が中央ユーラシアにまたがる国家を作らなかったのか。

A. ソグド人は騎馬の機動力・軍事力を持っていたとはいえ、あくまでその本質はオアシス地域に本拠を置く農耕都市民である。農耕都市民ではあるが、人口は中国本土やイラン本土などに比べて比較にならないほど少ない。だから、かれらが農耕に依拠する領域国家を作ることになれば、遊牧騎馬民に代わって中央ユーラシア型国家の主たる担い手になることもありえない。せいぜい、それを補助するだけである。

Q. ソグド文字についてもっと詳しく。

A. ソグド文字はアラム文字に由来し、後のウイグル文字の母となる。さらにウイグル文字がモンゴル文字になり、モンゴル文字が満洲文字になる。アラム

文字はフェニキア文字・ギリシア文字・ローマ字と兄弟・従兄弟関係にあるから、アラビア文字やインド系文字も含めて、世界中のアルファベットはほぼ一元論で解ける。帝国書院『最新世界史図説タペストリー』（三訂版、p. 47）「世界の文字」を参照。完全に正確ではないが、だいたいの様子は分かる。

Q. ソグド人の宗教についても詳しく。

A. 一般的に祆教（ゾロアスター教）だったといわれるが、そうとも限らない。中央アジア出土のソグド語文書にはマニ教・景教（キリスト教）・仏教のものが多くある。どうして人口のそれほど多くないソグド人が、これらいくつもの宗教を支えるほどにじゅうぶんの教徒を維持できたのか、いまだに不明である。もしかしたら、今の日本人のように、家族の幸福や旅の安全を祈願するために、1人がいくつもの宗教に寄進するという構図だったのかも知れない。

Q. シルクロードの重要商品としての奴隷と、奴隷の供給源について説明してほしい。

A. 奴隷の供給源は一般的には戦争捕虜と債務奴隷である。しかし実態は相当に多様である。シルクロードの重要商品としての奴隷とともに、詳しくは拙著『シルクロードと唐帝国』を参照して下さい。

Q. 世界帝国としての唐の確立した年代はいつなのか？これまでは628年と教えてきた。

A. それでも間違いではありません。突厥を除く国内の群雄のすべてを平らげたのは628年のことで、ここによやく唐による漢人中国（本当は唐人中国と言うべき）の再統一が完成します。しかし、中央ユーラシア史全体の流れからいえば、630年の唐による東突厥打倒・併合、657年の西突厥打倒が重要な画期であり、私なら唐の確立を630年とします。つまり唐代史を中国の内側だけから見れば628年、中央ユーラシア全体という外側から見れば630年となるはずです。

太宗・高宗2代が唐の絶頂期ですが、657年は父の偉業を受け継いだだけの凡庸な君主・高宗の時代ですので、評価しにくいのです。唐帝国を世界帝国にしたのはやはり太宗・李世民です。私は本講演で、李世民的悪口をいっぱい言ってきました。彼は歴史を捏造した権力者だからです。しかし、確かに大きな功

績も残したのです。

Q. 唐を拓跋国家とみなす学説は、日本の学界、さらに中国や欧米の学界では、どの程度認知されているのか。

A. 唐の王族・李氏が拓跋出身であることを認めない者は、もはや世界中のどこにもいません。ただし問題になるのは、中国でも日本でも同じで、多くの「中国史」学者が、唐の王族・李氏をはじめとする支配者階級の集団はすでにほぼ完全に「漢化」してしまっていたに違いないと信じ込み、我々のような見方に対して冷淡だったことです。我々の見方は、日本では京都大学の杉山正明教授が多数の一般向け概説書で強く主張したことによって、かなり広く知られるようになり、帝国書院の高校教科書にさえ取り上げられました。私は、以前の講義でも述べましたが、杉山説に追従しているのではなく、杉山教授と一緒に中央ユーラシアの側から中国史を見るという立場を育て上げてきたのです。とはいえ、私とて唐代の漢人文化、漢字文化のすごさを否定するつもりは毛頭なく、行きすぎた振り子に戻すために違いを強調していることを付け加えておきます。太宗を取り巻くブレーンたち（特に漢字文化の担い手であった山東集団）が「漢化」を推進したこともまた事実でしょう。

Q. ソグド人の安興貴・安修仁兄弟は後には仲違いしたのか。

A. 玄武門の変の時、安興貴・元寿父子は李世民側、安修仁は李淵側にいたが、これは安氏の分裂ではなく、これまた二股を掛ける安全保障策だと思われます。安興貴・安修仁兄弟が李淵と李軌という2人の群雄に二股を掛けたこと、後に安禄山を養子にする安氏一族が、8世紀初頭において唐と突厥（第二帝国）に二股を掛けたことと比較しても、東方に進出したソグド人の見事な処世術とみるべきでありましょう。

Q. 太宗を支えた山東集団とは何か。

A. 高祖・李淵に仕えた太原蜂起以来の家臣団ではなく、太宗・李世民が新たに自己の配下に取り込んでいった集団のこと。多くが山東（旧北齊領）出身の漢人であった。Cf. 山下将司「玄武門の変と李世民配下の山東集団——房玄齡と齊濟地方——」『東洋学報』85-2、2003年、pp. 19-49；堀井裕之「即位前の唐太宗・秦王李世民集団の北齊系人士の分析」『駿台史学』125、2005年、pp. 21-45.

Q. 唐太宗の歴史改竄の具体例について知りたい。

A. Cf. 『北齊書』『晋書』『貞觀氏族志』などの編纂：丸橋充拓「唐太宗の紀功寺院建設——政權正統論の形成をめぐる——」『大谷大学史学論究』7, 2001, pp. 19-49；山下将司「唐初における『貞觀氏族志』の編纂と「八柱国家」の誕生」『史学雑誌』111-2, 2002, pp. 1-32。また拙著『シルクロードと唐帝国』でも随所で言及する。

Q. ソグド人郷団と府兵制との関係については何を見ればいいのか。

A. Cf. 山下将司「新出史料より見た北朝末・唐初間ソグド人の存在形態——固原出土史氏墓誌を中心に——」『唐代史研究』7、2004年、pp. 60-77；山下将司「隋・唐初の河西ソグド人軍団——天理図書館蔵『文館詞林』「安修仁墓碑銘」残巻をめぐる——」『東方学』110、2005年、pp. 65-78。

Q. 蕃君長に関して、当時の日本の扱いはどの程度だったのか。

A. 唐の「敵国」は突厥（西突厥の後裔の突騎施も含む）・回鶻（ウイグル）と吐蕃だけで、あとは蕃域と絶域という扱いです。「敵国」というのは「匹敵する国」という意味で、対等国を示している。新羅は蕃域に入るが、日本ははるかな絶域で、問題にしてもらっていない。

8世紀の長安の宮廷において、吐蕃・大食・新羅などの使節と遣唐使が朝賀の儀式の席次をめぐる争ったという記事が伝えられていますが、あの記事の信憑性はかなり怪しい。たとえ日本の席次が、伝えられているように本当に上がったのであっても、それは遠くて珍しい国にも唐皇帝の威徳が及んでいたことを参列者たちにヴィジュアルに見せるという政治的判断であって、唐が日本を吐蕃・新羅より重視していたはずはない。大食とはいい勝負だったと思われる。山内晋次「唐朝の国際秩序と日本」『奈良平安期に日本とアジア』（吉川弘文館、2003年、pp. 10-35）とくに p. 30 を参照。

ただし、私の講義で言及した昭陵の蕃君長は、7世紀も前半の話である。白村江の戦いの前であるからして、日本など問題になろうはずがない。

Q. 大量の鮮卑人や突厥人が北中国に移住してきたときの具体的状況について知りたい。

A. 鮮卑人については、川本芳昭『中華の崩壊と拡大 魏晋南北朝』（中国の歴史5、講談社、2005年）を参照。突厥人については、やはり拙著を参照。

Q. 費也頭についてもっと説明して欲しい。

A. Cf. 石見清裕「唐の建国と匈奴の費也頭」（石見清裕『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院、1998所収）。これが私の依拠した論文です。

Q. 拓跋国家と独孤氏の関係は？

A. 独孤氏も匈奴系といわれている。

Q. 拓跋とトルコ系民族との関係は？

A. これはまだ学界で論争があるところです。拓跋＝トルコ説と拓跋＝原モンゴル（Proto-Mongol）説のどちらも衰えを見せません。ただし、たとえ拓跋＝トルコ説が正しかったとしても、鮮卑全体で見れば必ずやその中に原モンゴルが含まれているでしょう。要するに民族生成の過程ですから、後のトルコかモンゴルかまだはっきりしないわけです。それは現代のフランス人とドイツ人の先祖が、シャルルマーニュ（カール大帝）の時に截然と分かれていないのと同じことです。

Q. 均田制・租庸調制・府兵制は隋唐支配の3点セットといわれている。実際にはどの程度、機能していたのか。また、さまざまな生産形態を持つ被支配民族に対して、唐はどのような支配方法で臨んだのか。

A. 敦煌やトウルファンといった唐の辺境にのみ、敦煌文書・トウルファン文書として均田制をやっていた証拠が残っている。中国本土に関しては一切ないが、それは史料の残存状態の偶然性だろう。また唐帝国内の被支配民族には遊牧や商業を生業とする集団が多かったが、それらに対しての直接支配といわゆる羈縻支配の実態について、均田制・租庸調制・府兵制との関連を視野に入れながらの再検討もこれからの課題である。

Q. 沙陀とはどういう民族なのですか。

A. 沙陀というのは沙陀突厥の後裔で、やはりトルコ系民族です。しかし、10世紀の北中国に五代のうちのトルコ系4王朝（後唐・後晋・後漢・後周）を形

成した沙陀族の場合は、そこにソグド人やソグド系突厥の要素も加わっていませんから、8世紀までの沙陀とは違う沙陀族ということになります。つまり10世紀の沙陀族の中にはトルコ系もいれば、ソグド系も漢人もいる。皆がまとまって、国を作れば、それがそのうち「〇〇民族」になる。

よく誤解されるが、現代の新疆にいるウイグルというのは、私が講義で紹介した前近代のウイグルとは似て非なるもの。20世紀になって「おれたちウイグルになろう」といってなった新しい民族集団。いわば偽ウイグルです。歴史上の民族概念は全てその程度のもの。いまはまだ「アメリカ民族」はいないが、100年200年たてばアメリカ民族ができるだろう。人種や言葉が色々でも、皆英語をしゃべるようになってアメリカ民族になるでしょう。国家が民族を作るのです。

Q. ビザンツから見たスキタイ人の問題

A. 中華世界から見た匈奴、イラン世界から見たサカ、ギリシア世界から見たスキタイは、最初は固有名詞であったかもしれないが、後世には単に「遊牧騎馬民族」や「北方の野蛮人」を指す普通名詞になってしまった。それゆえ、たとえ同じ名称で呼ばれていても、人種・民族・言語を異にする場合が少なくないことに注意してほしい。

Q. 煬帝と楊姓の関係について：

A. 両者は無関係。煬帝は死後につけられた諡（おくりな）である煬皇帝の略。「煬」は「礼を去り衆を遠ざく」「天に逆らい民をしいたぐ」という悪い意味。

Q. 長安以外にも胡風は広がっていたのか。

A. 唐では長安以外にも大都市は多く、胡風はそこにも確実に広がっていた。同時代の西欧の都市人口と比較すると、違いが際立つ。世界最大は長安とバグダッドで共に100万（実際は100万まではない）。20～30万都市なら中国をはじめアジア各地に相当数あったが、ヨーロッパでは南欧のコルドヴァで16万、ローマで5万といわれる。西欧ではパリで2万5千、ケルンで1万5千だという。一方、中央アジアのオアシス都市国家も数千～数万の規模で、同時代のパリやケルンと同じ程度、あるいはそれ以上の人口を有する都市が中央アジアには相当数あった。ウイグル帝国でソグド人や漢人など主に定住地域からの使節・商

人・伝道者を住ませるために草原に作られた首都オールドバリク（遺跡名はカラバルガスン）でさえ、遺跡面積から推定すると数万は住んでいたようである。つまり西欧都市以上のレベルということになる。

Q. 森安先生は欧米や中国がよほど嫌いなのですか。

A. 私は西洋文明や中華文明が嫌いなわけではないので誤解しないで頂きたい。私が嫌いなのは、権力を振りかざす強者や、強者に擦り寄る態度であり、そういう者に対して批判をしているのであり、強者の立場で書かれた西欧中心主義の歴史と中華主義の歴史に異を唱えているのである。批判は、強いやつに対してしかしないというのが私のポリシー。日本の高校で教える歴史が、あまりに西洋と中国に比重を置いていることを批判しているのである。西欧文明の最終ランナーの如き錯覚を持っている米国のひとりよがり、それに安易に追随する日本の指導者層に警鐘を鳴らし、同時に中華文明から蒙ってきた恩恵にも感謝しつつ、現代の誤った新中華主義をも批判している。

過去の歴史の見方に対してだけでなく、私は現代においても、権力の座にいる者に対しては、徹底的に批判すればよいと思う。それこそが、ヨーロッパ文明が人類に残してくれた最大の贈り物である自由主義、民主主義の根本を大事にすることでありましょう。

=====

Q. 安史の乱を「早すぎた征服王朝」としてとらえる視点をもっと詳しく；宮崎市定の財政国家論の視点が抜けているのではないか？

A. 拙著『シルクロードと唐帝国』の一節を引用する事によって、回答に替える。「早すぎた征服王朝」について、さらに詳しくは森安孝夫「ウイグルから見た安史の乱」『内陸アジア言語の研究』17、2002年、pp. 117-170（絶版ゆえ、大学図書館などで）を参照してください。

中国史の分水嶺

八世紀中葉に勃発した安史の乱が中国史上に持つ意義は極めて大きく、これまでも膨大な研究が蓄積されてきた。安史の乱を境に、唐帝国は西域を失うばかりか、中国本土の内部においてさえ藩鎮（節度使・観察使など）の跋扈を

許し、まさしく帝国時代であった前期（初唐・盛唐）に比べれば実質支配領土を極端に狭められたのであるが、淮南～江南の農業経済の飛躍的發展に支えられて、前期に匹敵する一世紀半近くの命脈を保つことになるのである。国家の常備軍についてみれば、それまでのように民衆への一律の租庸調制に基づく徭役でまかなうのではなく、土地課税重視の両税法と塩専売・商税などの間接税によって得られる税金で雇うようになるのである。

中国史の優れた研究に従えば、安史の乱以降は唐は自前で軍事力を調達する武力国家から、お金で平和を買う財政国家へと変身したというわけである。まさにその通りであるが、いわば別の国家になってしまったのであり、私は誤解を避けるためには、安史の乱以後は大唐帝国という呼称は使うべきでないと思っている。

視座を中国からユーラシアへ

私には、安史の乱は単に唐代史の分水嶺であるばかりでなく、中国史全体、ひいてはユーラシア史の分水嶺であるとさえ見えるのである。しかしながら、従来の研究において安史の乱の原因として指摘されるのは、宰相・李林甫が科挙出身の政敵の登場を嫌って安禄山のような異民族将軍を辺境の節度使に積極的に登用したから（胡漢の対立を煽った李林甫悪玉説）であるとか、遠方において玄宗に寵愛された安禄山と玄宗側近の皇太子や宰相・楊国忠（楊貴妃の一族）との間の玄宗後をめぐる権力闘争であるとか、謀反の意志ありと疑われて追いつめられた結果の否応なしの選択とか、長安のある関中と雑胡化した河北との地域的対立であるとか、いずれも中国史の視点からのものが多く、しかもほとんどマイナス評価である。

私は近年、ソグド人・トルコ人・ソグド系トルコ人たちが主役となった八世紀の康待賓・康順子の乱、安史の乱、僕固懷恩の乱、八～九世紀の河朔三鎮の動向、そして一〇世紀に入って五代の沙陀諸王朝と遼（契丹）帝国の成立という一連の動向を従来とは違った角度から見直し、それらを担った中央ユーラシア的勢力に注目し、安史の乱に従来とはまったく違う評価を与えることを提唱しつつある。中央ユーラシア的勢力とは、中央ユーラシア出身のモンゴロイドでアルタイ系（主にトルコ系で奚・契丹などのモンゴル系も含む）の騎馬遊牧民やコーカソイドでイラン系のソグド人、及びその混血種によって構成される遊牧的・軍事的・商業的集団である。

そしてさらに、唐朝に味方して安史の乱を「つぶした」とされるトルコ系のウイグル（回鶻）についても、別の評価がありえることを主張する。換言すれば、中央ユーラシア型国家の典型（いわゆる「征服王朝」）としての遼帝国の雛形として、かつて私自身が提唱した渤海に加えて安史の乱勢力、そしてさらにウイグル帝国の三者があったのであり、しかもその趨勢はユーラシア全体の必然的な歴史の流れ（長期波動）であった、という考えを提出しているのである。それは次のようなものである。

早すぎた「征服王朝」

生産力・購買力と並んで歴史を動かしてきた大きなモーメントは軍事力である。紀元前一千年紀初めに中央ユーラシアの乾燥した大草原地帯に馬を乗りこなす遊牧民族集団が登場し、地上最強の騎馬軍団を擁するようになってから、彼らの動向が世界を動かす原動力となったのは自然であった。

第一章で時代区分について述べたように、私は世界史の時代区分の中に、④遊牧騎馬民族の登場と、⑤中央ユーラシア型国家優勢時代、を設けている。とりわけユーラシア史の一大転換期として注目するのは、⑤が始まる一〇世紀前後の時代である。この時代になると、ユーラシアには東から順に遼（契丹）帝国、沙陀諸王朝（五代のうち後唐・後晋・後漢・後周の四王朝）、西夏王国、甘州ウイグル王国、西ウイグル王国、カラハン朝、ガズナ朝、セルジューク朝、ハザール帝国など、同じ様なタイプの中央ユーラシア型国家がずらりと並び立った。

すなわち、④遊牧騎馬民族の登場となった紀元前一〇世紀頃以降の長い時間をかけて、豊かな農耕・定住地帯への略奪・征服あるいはその住民との協調・融和・同化に成功と失敗を繰り返してきた遊牧民勢力が、一〇世紀頃に至ってついに、大人口の農耕民・都市民を擁する地域を少ない人口で安定的に支配する組織的なノウハウを完成することができたのである。それらのノウハウとは軍事的支配制度、税制、人材登用制度、商業・情報ネットワーク、文字の導入、文書行政、都市建設などであり、それらを支える最大の基盤は、遊牧民集団の軍事力とシルクロードによる財貨の蓄積であった。

しかしながらそれだけでは支配は一時的に終わってしまい、より安定した強固な「征服王朝」を維持するには不十分である。そのために必要だったのは、いくつもの要素が複雑に絡み合った「システム」の構築であったと思われるが、

その根幹に文字文化（文字の普及と文字を使用したの文書行政）があったことはいままでのない。

人口の少ない「北方」の遊牧民勢力が、従来からの本拠地である草原に足場を残しながらも、「南方」に位置する都市や農耕地帯を支配する中央ユーラシア型国家を一挙に出現させたのは、決して偶然ではありえない。長い歴史を経た「北方」勢力の水準が、武力のみに頼るのではなく、文書行政を通じて直接・間接に「南方」を支配するシステムを構築できる段階に至っていた、だからこそユーラシア全域にわたってほぼ同じ時期に同じ様な現象が見られたと考え、そこに歴史的必然性を見出すべきなのである。安史の乱側の勢力はもとより、それらを鎮圧する側の唐の軍隊でさえその中核は同じく中央ユーラシア的勢力の騎馬軍団であったことを絶対に忘れてはならない。

このような見方に立てば、安史の乱には「乱」というレッテルに象徴されるような中国史側からのマイナス評価だけでなく、ユーラシア史の側から積極的なプラス評価を与えることができるのである。それは安史の乱が、一〇世紀前後に全ユーラシアにわたって認められる歴史的動向に連動するもの、より正確に言えば先行する事象であったと認めるからなのである。安史の乱を起こし、それを維持した背景に、遊牧民の軍事力と、シルクロード貿易による経済力の両方があったことは、すでに中国の榮新江によっても指摘されている。つまり征服王朝となる条件は十分に備えていたはずなのであるが、最終的には安史勢力はウイグルを味方に取り込むことができず、軍事的に破綻したのである。もし安史の乱が成功していればそれは安史王朝となっていたであろうが、いかんせん八世紀にはまだそうなる基盤が十分には整っていなかった。だから安史の乱はいわば「早すぎた征服王朝」だったのである。

=====

Q. 漢民族の実体、漢化の概念についてもっと詳しく。

A. これまた拙著『シルクロードと唐帝国』の一節を引用する事によって、回答に替える。

漢民族の実体

ただ中国の場合はいささか事情が違うのは、言語といっても口語ではなく文

語、つまり書き言葉による統一への指向である。中国は歴史上常に多民族国家であったのに、いつも異民族は「漢人に同化」したとか「漢化」したと多数派である漢民族が主張してきたのは、共通の文語すなわち漢文があったからである。

現代でいえば、漢民族はもとより、新疆のウイグル族もチベット高原のチベット族も内モンゴルのモンゴル族も広西のチュワン族もみな漢語（中国語）の読み書きができるようになってきているから、「中華民族多元一体論」などというのが出現する。多元の中の中華というのは、結局は漢民族中心の中華思想であり、これまた国民国家をめざした近代主義的虚構にすぎないのである。チベット人は現代において中国人ではあるが、中華民族ではない。本当は互いに通じ合わない口語をしゃべっているにもかかわらず、強制的な文語の統一によって中華民族という一民族を創造するという無理をしなくても、中国は多民族国家だと宣言すれば政治的になんの問題もなからう。

中国人というのはあくまで中国国民であって漢民族とは別のはずである。しかもその漢民族でさえ一筋縄ではない。漢民族という呼称は漢帝国に由来するが、前漢・後漢時代の漢文化に北の遊牧文化、西方の仏教文化・イラン文化などが混じり合って唐文化が成立した。その背景には当然ながら五胡十六国時代の大量移動をはじめとする異民族（現代中国で言う少数民族）や異国人の大量流入があった。このように「漢文化」と「唐文化」は別物なのであるから、唐代の漢民族も正しくは「唐民族」というべきであるが、そこは話がややこしくなるので、本書でも普通の表現を踏襲する。そして唐代の漢民族・漢文化は遼・金朝で再び変わり、モンゴル民族と色目人が入り込んだ元朝でもっと変わった。そして最後は満洲族の清朝の登場である。現在の漢民族の民族衣装の典型であるチャイナドレスというのは、満洲人の服装であって、漢代とも唐代ともなんの関係もない。現代中国語の標準語となっている北京語も、清朝の支配者となった満洲人たちが話した中国語である。中国史は決して漢民族史ではない。

断っておくが、私は中国を政治的に混乱させようとする分裂主義者ではない。しかしゲルマン民族大移動期が大分裂の時代であると同時に大融合の時代であり、後のヨーロッパ諸民族形成に大きなきっかけを与えたのと同様、五胡十六国時代も大分裂と同時に大融合の時代であって、新たな漢民族の形成期であった。そのような大分裂と大融合をその後も何度か繰り返して、今の漢民族があ

るという事実を、客観的に述べているだけである。

中世以降の西洋史は、古代のギリシア・ローマ人からは野蛮視されていた北方のゲルマン人が切り拓いたように、五胡十六国時代以降の中国史は漢民族からは野蛮視されていた北方の異民族が切り拓いたのである。そしてギリシア・ローマ人とゲルマン人が融合し、さらに後にアヴァール・ブルガール・ハザール・スラブ・マジャールなどとも混交して新しい西洋人が誕生していくように、漢族と五胡（三〜五世紀の華北で活動した匈奴・鮮卑・氐・羌・羯に代表される遊牧系少数民族の総称）が融合した上に突厥・鉄勒・吐谷渾・沙陀・党項・奚・契丹・韃靼・女真・モンゴル・満洲族とも順次混交していくことによって新しい中国人が生まれていくのである。西洋人が多種であるように、中国人も多種であって、西洋民族などというものがいないように中華民族も存在しない。漢民族はあくまで中国人の多数派にすぎない。

=====

最終日の討論：

Q. 理科系的歴史学というのを提唱されるが、実証史学という表現でいいのではないか。理科系的という言葉に何らかの価値が入っているように思えるが？理科系重視の風潮を意識してのことか？

A. 簡単に言えば、実証史学のことを理科系的歴史学と言っている。この言葉は単にわかりやすく学生に教える時のアイデアとして出てきた言葉。戦略的意図は無い。

Q. 唐は、遊牧的世界の中で勝利して、農耕的世界のチャンピオンになったら、その支配は遊牧民が農民を支配するというタイプであると捉えるということになる。これまでは均田制や府兵制を、農民の中で農民を支配する、というタイプと考えられてきた。それがどのあたりから来たのか。均田制・府兵制自身が、実は農耕民的な文化なのではないか。

A. 森安：学界では均田制・府兵制自体に、古い漢民族由来ではない新しい遊牧民的要素があると指摘されてきている。まず均田制そのものは、北魏の時代からのアイデアで、遊牧民が中国農耕民を支配する時のアイデアではないかと

いう考え方がある。府兵制については、兵農分離なのか兵農一致なのかという大原則自体にも議論があり、まだまだこれからの課題。Cf. 白須浄真、書評：氣賀澤保規著『府兵制の研究』、『東洋史研究』60-1、2001年、pp. 174-185。

=====

Q. オゴタイ=ハン国についてなのですが、最近の教科書からは表記が消えています。ただ、図説などにはまだ四ハン国として残っているものもあります。帝国書院のタペストリー2006年度版の13世紀の世界には表記があります。ただし、帝国の教科書にはありません。ある程度調べていくと、どうもこの国は国=ウルスとしての実態がなかったようなのですが、これはもう定説と考えてよろしいのでしょうか？先生のご意見をお聞かせください。

A. 日本のモンゴル時代史研究は世界のトップレベルにありますが、その中核は杉山正明・京都大学教授、松田孝一・大阪国際大学教授であり、それに続く年代にも多数の俊英がおります。今回は松田孝一教授ならびに村岡倫・龍谷大学助教授よりオゴタイ・ハン国についてコメントを戴きましたので、私の責任でそれをアレンジしました。以下の通りです。

なお私自身はモンゴル時代史研究の中でウイグル文書を扱いますので、全体の一角を担っていますが、私の本領はあくまでモンゴル以前の時代のシルクロード史と遊牧騎馬民族史の研究です。

従来は、遊牧ウルス（遊牧地と遊牧民）を持つ王家の王子の集まり、そしてそのまとまりの長（当主）の存在をもって、「ハン国」と定義していた。チンギス汗の長男ジョチ（=ジュチ）、次男チャガタイ、三男オゴタイ（=オゴデイ、ウゲデイ）、そして四男トゥルイの子（チンギス汗の孫）であるフレグ（=フラグ）の各王家の子孫たちは、それぞれの属する王家のハン（当主）を選出して結束していたため、歴史研究者はそれらをキプチャク・ハン国、チャガタイ・ハン国、オゴタイ・ハン国、イル・ハン国と呼んできた。オゴタイ家にもハイドゥ（=カイドゥ）、ハイドゥの子のチャパルが当主として選出されていたので、その時までは、オゴタイ・ハン国と呼んでよいと考えられたわけである。

しかし近年のモンゴル時代史研究の進捗により、「ハン国」の定義がより厳密になった。上記の要素のほかに、その領域の内にある都市を含めて領域国家となったものだけをハン国と呼ぶようになった。モンゴル帝国初期にはそれらの

都市は大ハン（モンゴル皇帝）の所轄に属し、諸王家が勝手な支配権を行使できなかったため、ハン国の範疇に入らないものが生じるようになったわけである。

初め、モンゴル帝国が成立した時には確かに、ジョチ・ウルス、チャガタイ・ウルス、オゴタイ・ウルスは存在した。しかし、ウルスは後には「国」とも訳すが、もともとは単に、その配下の遊牧集団を指す言葉であった。決して普通の現代人が考えているような国家ではない。帝国が広がっていった、付随するウルスが広がっても、都市はあくまで大カアン（モンゴル皇帝）の直轄であり、各ウルスの当主の力が及んでいるのは、あくまで配下の遊牧民と遊牧地であった。

ところが、第4代大カアンであるモンケ時代の1250年代、ジョチ・ウルスは独立し、都市などの支配もモンケに認められ、我々が考えるような領土国家となった。これが最初のハン国「キプチャク・ハン国」である。次いで1260年代、フビライが第5代大カアンに即位するに伴って、イランに遠征していたフレグが自立し、フビライに認められて、第2のハン国ができた。これが「イル・ハン国」である。

フビライ即位頃まで、西北モンゴルから中央アジアにかけては、チンギス汗時代から変わらずオゴタイ家、チャガタイ家（つまりオゴタイ・ウルス、チャガタイ・ウルス、この場合ウルスはあくまで単なる遊牧集団）が遊牧生活をしてきたが、都市は大カアンのもので、決して、領土国家としてのオゴタイ・ハン国、チャガタイ・ハン国などは存在しなかった。

ところが、フビライに反抗したハイドゥ（オゴタイの第5子カシの子）が、反フビライ派のオゴタイ家の諸王、チャガタイ家の諸王、トルイ家の諸王（特に、かつてフビライと帝位を争った彼の弟アリク・ブケの子供達）らをまとめ、中央アジアに自立し、当然、本来は大カアン直轄だった都市も掌握し、ついに領土国家を作った。これが第3のハン国である。ただしそれは史料上はあくまで「ハイドゥの国」であり、しかもハイドゥは、オゴタイ家、チャガタイ家の諸王子たち、それとフビライ家などを除くトルイ家の諸王子たちの遊牧ウルスをまとめたので、それをオゴタイ・ハン国と呼ぶのは適当ではない。

「ハイドゥの国」の内部には、ドアを当主とする「チャガタイ・ウルス」があったことがラシード＝ウッディーンの『集史』に書かれている。とはいえ、ド

アはあくまでハイドゥを君主と仰いでいたから、それはやはり、ハイドゥ政権内のチャガタイ家遊牧軍団を統轄する者という程度にとどまった。松田孝一が明らかにしたメリク・テムル（アリク・ブケの子）の軍団も同様のものであろう。なぜなら、この頃、メリク・テムルの軍団もやはりハイドゥ政権下にあったとみなせるからである。もしかしたら、ハイドゥ政権内の主力だったかもしれない。ハイドゥ率いるオゴタイ家の軍団、ドア率いるチャガタイ家遊牧軍団、メリク・テムル軍団、それらの連合体というのが「ハイドゥの国」の実体であり、しかも、オゴタイ家内部の有力家系であるコデン（オゴタイの次男）家、カダアン（オゴタイの第6子）家などはむしろ元朝側に付いてしまっていた。そのような現実を踏まえれば、ハイドゥが、自分はオゴタイ家の正統を継ぐ者だとして、自分の政権を「オゴタイ・ウルス（オゴタイの国）」とは言いづらかったのではないだろうか。実際、史的にも「ハイドゥの国」という言葉はあるわけだから、研究者の側も「オゴタイ・ハン国」とは言いづらいのである。

しかるに 14 世紀初頭になって、「ハイドゥの国」はその子であるチャパルの時代に、チャガタイ家のドアによって乗っ取られてしまう。当時、ドアはおそらく「ハイドゥの国」のナンバー2であったと思われる。ただし史料中でそれを新たに「ドアの国」と呼ぶことはなく、ドア、およびその子孫は自分たちの国を「チャガタイ・ウルス（つまりチャガタイの国）」と呼んでいた。さらにその後、その治下のトルコ・モンゴル遊牧民たちは、「チャガタイ人」と自称し、他からもそう呼ばれていたらしい。

それゆえ、ドアの時に初めて「チャガタイ・ハン国」が成立したということができる。かつて加藤和秀・東海大学教授もこの国の成立をもって「チャガタイ・ハン国の成立」としている。逆に言えば、それまではオゴタイ・ハン国だけでなく、チャガタイ・ハン国も存在しなかったのである。

ドア一族は、自分たちこそチンギス・カンの次男チャガタイの王家の正統と言いたかったのであろう。特に、同時期の元朝治下に、チャガタイ家の嫡流ではないが有力な王子であるチュベイやアジキなどがいたわけだから、なおさらそうであったと思われる。チャガタイ→何代か飛んで→バラク→ドア→そしてその子供達に世襲されるのが、真の「チャガタイの国」という考えがあったのだらう。

さらにそのチャガタイ・ハン国は、多少のオゴタイ家、アリク・ブケ家の者は残ったものの、やはり、それらの王家の主力を中央アジアから追い出す形で

成立したチャガタイ家（ドア家）独裁の政権だったのである。

以上のような次第で、領域国家をハン国と定義し、ハイドウ、ドアの覇権の継承を考えると、昔の教科書に載っているチャガタイ・ハン国、オゴタイ・ハン国が並立するのではなく、中央アジアには、ハイドウの国が 13 世紀から 14 世紀初頭まで存在し、14 世紀初頭以後はチャガタイ・ハン国がそれにとって変わるという流れになる。13 世紀にも 14 世紀にもオゴタイ・ハン国という名の領域国家は存在しなかったという結論になる。

=====